



ちーべん

太田直子監督映画上映会&トークイベント 『まなぶ 通信制中学 60年の空白を越えて』

『まなぶ』ことの意味とは？

このたび、千葉県弁護士会社会福祉委員会は、映画「まなぶ 通信制中学 60年の空白を越えて」(監督:太田直子, 製作・配給:グループ現代)の上映会を行います。

この映画は、戦後の混乱期にさまざまな事情により義務教育を受けられなかった高齢者たちが通信制中学に通う姿を、5年にわたり記録したドキュメンタリー映画です。この映画を通じて憲法26条が規定する教育の機会保障の在り方や“まなぶ”ということの意味について共に考えていきましょう。

当日は、監督の太田直子氏をお招きし、映画についてのエピソード等も交えたお話をいただく予定です。一同ご来場をお待ちしております。

日時 2018年5月19日(土) 14時~16時30分

会場 千葉県弁護士会館 3階 講堂

Guest 映画監督 太田直子 さん

1964年生まれ。高校非常勤講師、書籍編集などの仕事を経て映像の仕事に携わる。前作の『月あかりの下である定時制高校の記憶』(2010)は平成22年度文化庁映画賞ほか各賞を受賞し、高い評価を得ている。

**入場
無料**

(定員100名)

お問い合わせ (千葉県弁護士会事務局)

TEL 043-225-4860

【電話受付時間】
平日午前9時~12時
午後1時~5時

主催：千葉県弁護士会

映画『まなぶ通信制中学60年の空白を越えて』上映会

映画の舞台は東京都千代田区立神田一橋中学校通信教育課程。毎月2回の休日、戦後、中学校で義務教育を受けられなかった高齢の生徒たちが、面接授業に通ってくる。60年ぶりの学校生活にとまどいながらも、学ぶ喜びにみちた表情の生徒たち。教えるのは生徒の子や孫の年齢の先生たちだが、生徒たちの人生経験を踏まえた、あたたかいまなざしにみちた授業が展開される。休み時間には、まるで十代の少女に戻ったかのように互いの家庭の事情を語りあい、笑いあう。そんな学校生活の日常に2009年から2014年までの5年間カメラを向けたのが、この作品である。

学校にたどりついた背景は一人一人それぞれ異なる。映画は6人の生徒の背景にもよりそう。戦争で大黒柱の父を亡くし、働かざるをえなかった人、戦時下、空襲で焼け出され、満足な教育を受けられなかった人。戦争は子どもたちから教育という大切な宝を奪った。そして、高度経済成長に向かう日本社会の片隅にも、貧困のため中学校に通えず、働いていた子どもたちがいた。自ら選択できなかった人生の終盤に、ようやくたどりついた学び舎。先生がいて、同級生がいて、学びの前に生徒たちは青春時代に帰る。夫や妻の介護、自身の病気を乗り越え、中学で学んだ基礎をもとに高校進学をめざす生徒も現れる。

平成29年度文化庁映画賞（文化記録映画部門）文化記録映画優秀賞受賞作品

撮影・監督・語り：太田直子 プロデューサー：田野稔
制作著作：グループ現代

お申込・お問い合わせ先 千葉県弁護士会

電話 & FAX 043-227-8431

お申込の際は、下記申込票にご記入の上、FAXに①氏名、②所属、③ご連絡先を明記の上お申込み頂くか、下記QRコードのフォームからお申し込みください。

※定員に達した場合には先着順にてお申込を締め切らせて頂きます。

氏名

所属

ご連絡先

